

三浦半島言語地図(1984)

——第1分冊——

佐々木 英 樹

The Linguistic Atlas of the MIURA PENINSULA (KANAGAWA Pre.) (1984)

- Fascicle 1 -

Hideki SASAKI

三浦半島言語地図(1984)について

「神奈川県三浦半島言語調査 (1984)」(以下、三浦調査 (1984)と略称) は、1984 (昭和59年)、筆者 (佐々木英樹) の指揮下、上智大学ふるさとことば研究会の学生諸氏が実施した臨地調査を指すものです。『三浦半島言語地図(1984)』は「三浦調査」で収集した資料に基づいて地図化したものです。これより先、筆者は「東京湾岸言語調査」(以下、湾岸調査と略称) を計画し、1982-3(昭和57-8)に「湾岸調査」の一環として三浦半島の臨地調査をしました。その際使用した調査票は、今回取りあげる「三浦調査 (1984)」の調査票とは異なります。「湾岸調査」の調査票は湾岸沿いの各調査地域に共通した内容です。したがって、「三浦調査 (1984)」の調査票は三浦半島独自の調査票です。さらに、念のために申しますと、「湾岸調査」の際の三浦半島でのインフォーマントの方々も、「三浦調査 (1984)」でのインフォーマントの方々とは別の方々です。

「湾岸調査」については、上智大学ふるさとことば研究会がもっぱら母体でしたが、最後のほうでは、駒沢女子大学ふるさとことば研究会が参加し、1997(平成9)年をもって終了しました。現在、それまでの収集資料に基づく地図化を準備中です。「湾岸調査」の一環として行なった「三浦調査 (1982-3)」とそれとは異なる調査票で行なった三浦調査(1984)で特筆すべきは、ヴォランティアの調査員として、地元横須賀市秋谷在住の永瀬弘子氏が参加されたことです。夫君治郎氏は方言学者(専修大学教授)で、『山梨県言語地図集』(第1回新村出記念刊行助成金受賞)をはじめ既に多くの優れた調査研究を公刊され、ご活躍中です。そういう環境のなかで、弘子氏は地元の

言語調査を以前から考えておられたようでした。主婦として、特に時間の制約がありますので、ごつごうのつく範囲でお願いしました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

「湾岸調査」の出発点になった佐々木・W.A.グロウターズ・共編 (1984)『千葉県安房郡・館山市言語地図』(上智大学大学院刊)の為の調査が始まった1973年以来、空白の年もありましたが、24年間で、曲がりなりにも臨地調査を終了したことになります。「三浦調査 (1984)」は、その間にあって、一服の清涼剤であったと言えるかもしれません。

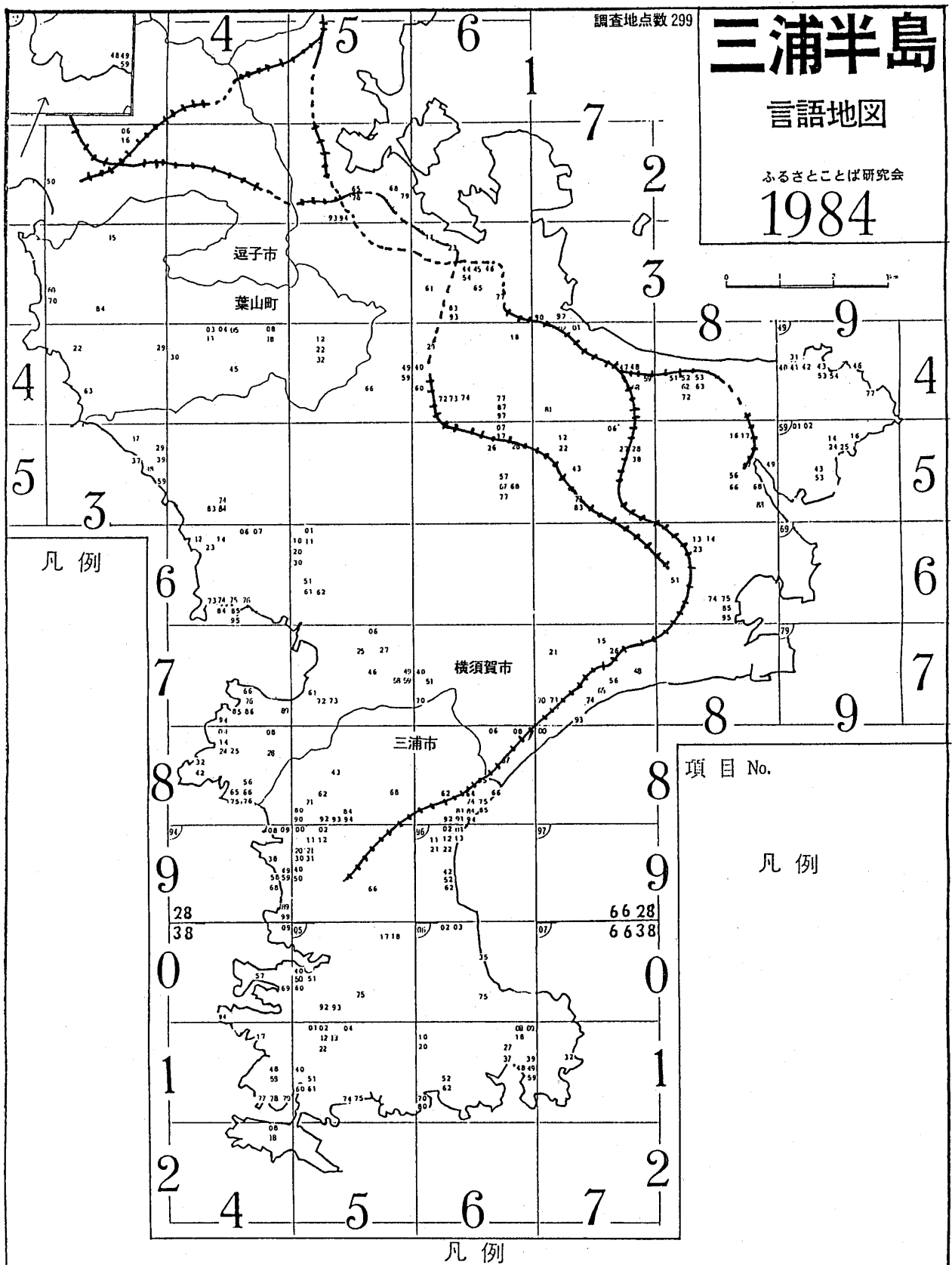
さて、この論考は、『三浦半島言語地図 (1984)』の巻頭の位置にあたるものです。そのため、次のような構成をとります。

三浦半島言語地図 (1984) について

- 1 三浦半島言語地図 (1984) 白地図
- 2 回答者 (インフォーマント) 一覧表
- 3 調査票の内容
- 4 論文「インフォーマントの回答はどのくらい安定しているか? ——言語調査方法論のために」

質問に快く応じてくださいました回答者の皆さま、調査の全過程でご協力をいただきました三浦半島の皆さま。皆さまのご協力がなかったら、この論考は出来上りませんでした。万感の思いを込めてお礼を申し上げます。

1 三浦半島言語地図 (1984) (鉄道と市・町を記入)



調査地点数：『日本言語地図』4／『関東地方分布地図』4／『神奈川県言語地図』13

担当者 佐々木英樹 (ささき・ひでき)

- と言いませんか。【良(よ)きそうだ】【いいよーだ】
- 221 「今晚テレビを観るか」ということを、目上の人にていねいに言うことば。【ご覧(らん)になる】【みらっしゃる】
- 222 部屋と部屋の境にある、絵の描いてある、紙をはった引き戸。【襖(ふすま)】【からかみ】
- 223 テレビを観る時は立って観ませんね。テレビの前にどうしますか。【座(すわ)る】【ぶつつわる、ぶつつある】
- 224 お孫さんと一緒にテレビを観ようとして、隣の部屋にいるお孫さんと呼び寄せる時。【来(こ)い】【こー】
- 225 お孫さんをどこかに(祭りなどに)誘って連れ出す時。【行(い)こう】【やーべー、えーべー】
- 226 家を建てたり、修理したりする人。【大工(だいこ)】【ばんじょー】
- 227 朝、時間になってもなかなか起きない人。【朝寝坊(あさねぼー)】【ねぼすけ、くそねぼー】
- 228 食欲が盛んで、よく食べる人。【食(く)いしんぼー】【くいてぼー、くいたしんぼー、くれてぼー】
- 229 本当でないことを本当らしくいうことば。【嘘(うそ)】【そら】
- 230 他人から気にさわることを言われた時の気持ち。【怒(おこ)る】【ちんばら かく、ちんばら たつ、ちんばら たてる、じんばら たつ】
- 231 人に言葉を口から出すようお願いする時、「黙っていないで()」と頼みますね。何と言いますか。【言(い)って下(くだ)さい】【そって ください、そいて ください】
- 232 ぽかぽかと体に気持ちよく感じる気温の状態。【暖(あた)たかい】【あったけー、ぬくい、ぬくとい、ぬくてー】
- 233 日が照っているのに降って来る雨。【天気雨(てんきあめ)】【きつねの よめいり、きつねの よめどり】
- 234 水の中に手を入れた時、「温度が低い」と感じた時の言葉。【冷(つめ)たい】【ひゃっこい、しゃっこい】
- 235 冬の朝、土の中の水分が凍ってできるほそい柱。【霜柱(しもばしら)】【たっぺ、しもだっぺ】
- 236 冬、軒先の^{のき}下がる氷の棒。【つらら】【あめんぼー、つるる、つるしんぼー】
- 237 農家で朝食の前にする仕事のこと。【朝食前(ちよーしょくまえ)の仕事(しごと)】【あさめしまえ、あさめしめー、めしめー、あさづくり、あさづくれ】
- 238 友人と会合に行って遅刻してしまいました。その場で友人にこういいます。「今日は遅刻したが、こんどはもっと早く()」。【こよー】【きよー、こべ】
- 239 がまんすることができないくらい苦しいこと。【つらい】【つれー、くげんする、くげんだ】
- 240 物を何かの上に置くこと。【のせる】【かける、けける】
- 241 煙突から出るもの。【煙(けむり)】【けむ、けぶ】
- 242 夕立の時、黒い雲の中でぴかりと光って音のするもの。【雷(かみなり)】【かみなりさん、ごろごろさま】
- 243 雷が鳴る時、ぴかりと光るもの。【稲妻(いなづま)】【いなびかり、ひかりもの】
- 244 一日のうちで、夜になる前の、あたりが暗くなり始める頃。【ゆーがた】【ひぐれ、ばんがた】
- 245 今日の前の日。【昨日(さくじつ)】【きんのー】
- 246 あさっての次の日。【しあさって】【やの あさって、やな あさって】
- 247 草が茂っている場所。【草(くさ)むら】【くさばっこ】
- 248 さんしょうの木やからたちの枝についているとがった針。【刺(とげ)】【ばら】
- 249 よく削っていない竹や板をこすった時、手に刺さって痛いもの。【刺(とげ)】
- 250 梅の花のそばに寄った時、ぶうんと鼻に感じるものを、梅の花の何と言いますか。【匂(にお)い】【にごい】
- 251 草や木がぼうぼうと生えているところ。【やぶ】【ぼさ、ぼら】
- 252 いつもじめじめしていて、葎が生えているような場所。【湿地(しっち)】【どあい、やち】
- 253 草やわら、その他のごみを積んで作った肥料。【堆肥(たいひ)】【どひ、どい】
- 254 大きな手のひらのような、かたい葉のある植物。【やつで】【やすで、てんぐっぱ、てんごっぱ】
- 255 これは何の絵ですか(絵)。【ちょーちょ】【ちょま、ちょーま】
- 256 この虫は何ですか。いろいろな種類がいます

- (絵)。【とんぼ】〔とんぶ〕
- 257 甘いものに集まってくる小さい虫。【蟻(あり)】
〔ありんば、ありんどー〕
- 258 これは何ですか。いろいろな種類があります
(絵)。【蛇(へび)】〔へびめ〕
- 259 秋にコロコロ鳴く黒っぽい虫。【こーろぎ】〔こー
ろげ〕
- 260 これは何ですか(絵)。【とーもろこし】〔とんも
ろこし〕
- 261 これは何ですか。ごまやみそをすりつぶすのに
使います(絵)。【すり鉢(ばち)】〔あたりばち〕
- 262 ごまやみそをすりつぶすのに使う棒(絵)。【す
りこぎ】〔すりこげ〕
- 263 おつゆの塩の味が足りない時、おつゆの味がど
んなだと言いますか。【塩味(しおみ)が薄(うす
い)】〔あまい、みずっぽい〕
- 264 塩の味はどのように表現しますか。【塩辛(しお
から)い】〔しょっぱー、しょっかれー〕
- 265 数や量が多いこと。【沢山(たくさん)】〔おんめ
ろ、おんめりょ、うんめろ、こんまく、がーと、
しっかり、うんと、いっぺー〕
- 266 自分の犬に餌^{えさ}を与えた、ということを他人に向
かって「犬に餌を()。」と言いますか。【やっ
た】〔くれた、あげた〕
- 267 二つの箱を比べて、(大きい方をさし)こちらの
方が(小さい方をさし)こちらよりもどうだと
言いますか(絵)。【大(おー)きい】〔おーっ
きー、でっかい、でかい〕
- 268 たいしたことでもないのに、大変なことのよう
にみせかけたり、ふるまったりすること。【おー
げさだ】〔ぎょーさんだ、きょーこつだ、きょー
こつねー〕
- 269 二つの箱を比べて、(小さい方をさし)こちらの
方が、(大きい方をさし)こちらよりもどうだと
言いますか(絵)。【小(ちー)さい】〔ちっちゃ
い、ちくい、ちこい〕
- 270 友人の家へ行って、入口で尋ねる言葉。【いるか】
〔いたか〕
- 271 約束の時間になっても相手がまだ来ない時、「時
間になるのにまだ()。」と言います。【こな
い】〔こねー、きねー〕
- 272 さっきまで自分と一緒にだった人が、今、見えま
せん。そういう時、「あの人はさっきまで確か
に、ここに()。」と言います。【いた】〔い
たった〕
- 273 「コワイ」という言葉を「恐ろしい」という意
味で使いますか。あの家の犬は大きくてよくほ
えるので「コワイ」というように。【はい】
- 274 「父は弟を自分の部屋で勉強させた」という時、
「自分」とは「父」のことでしょうか、それと
も「弟」のことでしょうか。【父(ちち)】
- 275 寒い時や作業をする時、上に着るもの(絵)。
【じゃんぱー】じゃんぱー
- 276 手をふく時使う四角い布。【はんかち】はんけち
- 277 万年筆に入れる液体。【いんく】いんき

4 論文

インフォーマントの回答はどのくらい安定しているか？

—言語調査方法論のために—

The Elicitation Technique in Speech Data Collection :

Does an informant always answer in the same way ?

I happened to discover a very rare case in our fieldwork for the Linguistic Atlas of the Miura Peninsula (Kanagawa Pre.) (1984). That is the case in which two different fieldworkers questioned one and the same native interviewee at two months and a half intervals: to be more exact, the first interview was on July 24, 1984, and the second one on November 13, in the same year. One of the two fieldworkers was a male college student and the other a housewife whose spouse is a professor of dialectology. The interviewee was a male native born in 1902. It is to be added that they used the very same questionnaire.

It was accidental but turned out to be highly valuable for field methodology. A careful comparison and analysis led to the following conclusions:

- 1) An informant differently responds even to one and the same linguistic stimulus.
- 2) ① Approximately 57 % of all 77 questioned items share identical responses in the completely and/or nearly strict sense.
② Approximately 43 % of all the items share entirely different answers from the other questionnaire.
- 3) Dialect forms are rightly assumed to be more difficult to elicit than standard ones are. Along this line, we can finally judge the female interviewer (referred as B in the text) to be more proficient in eliciting than the male interviewer (referred as A in the text).

1 目的と結論

同じ一人のインフォーマントに異なる二人の調査員が同じ調査票で、110日余り(三ヵ月半)の間隔をあけて質問し(第1回の調査日:1984年7月24日/調査者A、第2回の調査日:同年11月13日/調査者B)、回答をいただいていることが、収集資料の整理段階で明らかになりました。これは偶然の出来事でした。

尋ねた項目数は、2回とも77。これに対する2回の回答の異同を調べてみました。その結果、結論として次のことが分かりました。

- 1) このような僅かな間隔であっても、インフォーマントは、同じ質問に対して、すべて同じ回答をするわけではない。
- 2) 前後2回の回答の異同という点からは、大別すると次の二つの型になる。
 - ① 前後2回とも同一の回答(出現率、57.1%)。
 - ② 前後2回、異なった回答(出現率、42.9%)。
- 3) 標準語にくらべて引き出しにくい方言形を聞き出

せる可能性を追求する点からすると、まだ手を尽くす余地がある。例えば、上記2)①について言えば、項目番号233、258、262、263、266、271。

- 4) 上記3)の立場から、上記2)②をみると、調査者の技量の差は明確である。

2 先行研究

上記の結論を導いた根拠を示すまえに、これに類した先行研究をみておきます。

ここで扱うわれわれのケースは、調査者が二人の場合です。1回目と2回目の同じ質問に対してインフォーマントの回答の揺れが生じる要因として、具体的には、調査者の性別(男女)/年齢差(推測、10才あまり)が考えられます。しかし、男女差については、調査者の二人について、具体的にどういう尋ね方をしたのか知ることが出来ませんので、抽象的には考えられることでも、実際にそれがどういうふうに、回答を得るときに作用したかということについては、分かりません。年齢差についても、これく

らの年齢差なら、揺れを生じさせる要因にはならないがふつうではないか、という程度のことしか頭に浮かびません。その上、同一の質問文が質問内容の基本になっているのですから、男女差・年齢差が、2回の回答の揺れの原因になったとは考えにくい、と結論するのが順当でしょう。

この調査では、調査者は質問者であると同時に記録者でもありました。しかし、記録者が原因で揺れが生じた場合がないとは言えませんが、それは単に調査者にたいする訓練がたりなかった、あるいは不注意だったということになりましょう。そういう事故は、方言調査の誤差に属するものと考えべきでしょう。

繰り返しておきますが、ここで問題にするのは、複数のインフォーマントの回答の揺れではなく、一人の個人内において、①二人の異なる調査者が、②110日余りの間隔をおいた異なる二つの時期に、③同一の調査票を使って、という(偶然の結果としての)設定で得られた回答の揺れ、ということです。

方言を対象とした「回答の揺れ」研究は、(飯豊1998)・(国研1985)に豊富な例があり、特に便利です。その中から、今、上で指摘した、ここでの問題を設定している条件①-③に出来るだけ近いものを探します。しかしこれと同じ、あるいは非常に近い、問題設定をしているものは、私の目に入ったものに限れば、皆無と言ってもいい。そういう現状のなかで、結局この種の問題の先行研究として、(国研1985)所収の「同一被調査者の10年後の再調査——九州各地における調査から——」(佐藤亮一・白沢宏枝執筆、pp.295-319)と(徳川1993)所収の「言語地理学調査における質問と答え」(pp.283-94)を選ぶことにしました。この二つが比較的、具体的に論じているのもその理由です。この二つの先行研究との比較は当然、われわれの目下の問題について、既にどういうことが、どれくらい分かっているかを知るのが目的です。それを念頭に、三つの言語調査の概要を、下記のように一覧表にしました。

「言語調査における回答の揺れ」事例研究一覧表

地点・地域・地方	神奈川県横須賀市	九州全7県	新潟県糸魚川地方
典拠	三浦半島(1984)	国研(1985)	徳川(1993)
調査の間隔	三ヶ月半	10年	2年
*目的	共時的揺れ	通時的変化・共時的揺れ	共時的揺れ
**調査者 (男女)	男 → 女	男1 → 男2 (男1 ≠ 男2)	男1 → 男2 (詳細は不明)
被調査者	男	男	不明
項目数	77	235	不明
調査地点数	1	19	173
調査方法	調査票・面接	調査票・面接	調査票・面接
調査年	1984	1960・1970	1957・1959・1961

前頁の一覧表について、一部補足しておきます。

* 目的：三浦半島（1984）と徳川（1993）の目的は、2回の調査間隔からみて（それぞれ3ヵ月半、2年）、「共時的揺れ」と見るのに異論はないはずです。しかし、国研（1985）の間隔が10年となると、時間的变化つまり通時変化の調査と見るのが順当でしょう。かと言って、「共時的揺れ」性格がまったくないとも言えません。その結果、両者を併記することにしたわけです。

** 調査者（男女）：三浦半島（1984）は、1回目男性、2回目女性。国研（1985）はすべて、1回目の男性とは異なる男性が2回目の調査者。もう少し詳しく言えば、この調査の調査者は、1回目（8人）・2回目（4人）共に、男性。さらに、1回目・2回目共に同じ一人の調査者、という例はなし。徳川（1993）は、1回目も2回目も、調査者が男性であるという以外のことについては不明。

国研（1985:295-319）の要点をみてみましょう。九州7県19地点につき、第1回（1960）、第2回（1970）の調査の回答を比べて、次の4つのグループに分類しています。

- 1) 【2回共】「ほぼ、あるいは完全に一致するもの」(p.299)
- 2) 「音声的差異、またはそれに準ずるわずかな語形的差異のみが認められるもの」(p.300)
- 3) 「2回のいずれか（あるいは2回の両方）で複数の語形が回答されており、その一部が一致するが、一部に音声差以上の差異、すなわち、上記1)、2)を越える差異の認められるもの」(p.301)。(この中が、さらに5つに下位分類されているが、ここでは示さない。)
- 4) 「2回の間に一致する語形（回答）がないもの」(p.302)。(この中が、さらに4つに下位分類されているが、ここでは示さない。)

その結果として、次のように述べています——

上記1)に該当する例は調査した235項目の64.0%、同2)に該当する例は10.9%ということから、「ほぼ一致する」ものの率を、 $64.0 + 10.9 = 74.9 \div 75.0\%$ と計算する。つまり、2回とも同じ回答をしたと認められる例は、235項目の75%だということです。これに対して、残りの約25%を「語形的な差が認められた項目の割合」(p.318)としている。さらに、その25%の中から、「共通語形のみがかかわる事例を除」いて、方言形にかかわる事例（1回目に答えた方言形が2回目では出なかった、とか逆に、1回目に出なかった方言形が2回目に出た、という例）だけに絞ると、それは全体の約13%に当たる。結論として「現実には、この13%の誤差はいわば調査の宿命であって、われわれはこのような誤差が存在することを前提として言語地図をみるべきである」(p.318)。

この数字（全体の約13%）に該当する現象は、三浦半島（1984）の場合どのくらいの割合になっているか？すぐ後に具体的に提示しますが（後の分類において、II.2の部分に相当）、全体で76項目（1項目だけ文の解釈を尋ねるものがあります。それは除外しますから、 $77 - 1 = 76$ となる）のうち11項目がこれにあたります。これは $11/76 \times 100 = 14.47\%$ になり、「約13%」に近い数字になります。このことは注意しておいていい。

つぎに、(徳川1993:283-94)の要点をみてみます。「糸魚川調査は、1年おきに1957年・1959年・1961年の3回にわたって、それぞれ別々の調査票を用いておこなわれた」(p.283)。そして「第1次と第2次、あるいは第2次と第3次の調査票にいくつかの同一の調査項目を盛り込んで、同一質問に対する機会を異にする2回の答え間の異同を検証した」(p.283/下線は佐々木)ものです。糸魚川調査の総地点数186の内、「3回とも同一話者について調べた地点数は、106(57.5%)」(p.293)。「第1次調査と第2次調査が同一で、第3次調査が違う話者であった地点数は、24。第2次調査と第3次調査が同一で、第1次調査が違う話者であった地点数は、43」(p.293)。ということは、 $186 - (106 + 24 + 43) = 13$ で、残る13地点は、①3回とも別人、②第1次調査と第3次調査が同一で第2次調査は別人、のどちらかということになります。

次の三つのグループに分け、共通した特徴を挙げています——

- 1) 前回との差がほとんどない(10%内外の誤差) = 純粹の俚言
- 2) 前回との差がかなりある(20~30%内外の誤差) = ①地方標準語形、②特殊な俚言
- 3) 前回とほとんど一致しない = ①標準語形、②(不

適当な質問)

この論文の特徴は、2回の調査の異同を糸魚川全体の分布の中に位置させ、各グループの所属語の特徴を探ろうとするものです。

なお、どういう語がいくつ二度の調査に入れられたか、調査者が前回と同一か別人か、ということについては明記してありません。

徳川(1993)方式で三浦半島(1984)を見るということは、今すぐには出来ません。上でも触れたように、回答に揺れがあった語が、調査地域全体における分布でどういう性格をもった語か?これが基準になっています。従って、少なくとも「揺れ」に関連した項目の総合分布地図が完成していない現時点では、「揺れ」に関係した語の調査地域全体における性格付けができないからです。ですから、徳川(1993)方式で三浦半島(1984)を見るのは、三浦半島(1984)の最終分冊が出来るまで待たなければなりません。

以上見た先行研究に関する限りで得られる知見については次のように言えます。——「やむをえない“ゆれ”は全調査項目の13~15%前後に収まる」という可能性の可否を実地検討すべきである。同時にそのことが、調査者の技量の程度とどういう関係にあるか、ということも無視すべきではない。

3 結論を裏付ける根拠

2回にわたる回答の揺れの実態を具体的に示してみましょう。下記のように、全体を大きく二つに分類しました。《 》内は回答語形、()内は、調査項目番号を指す(調査票参照)。なお、すべて「ひらがな表記」に統一しました。

I 第一回の回答と第二回の回答を同形と認めたもの〔44項目=57.1%〕

I.1 第一回の回答と第二回の回答がまったく同形

- 1) 《つら》(201)
- 2) 《みぞおとし》(203)
- 3) 《おやいび》(204)
- 4) 《しゃてー》(206)
- 5) 《はやす》(208)
- 6) 《くめんがいー》(211)

- 7) 《ぜに》(212)
- 8) 《かんじょーしる》(213)
- 9) 《けーてやる》(214)
- 10) 《けーる》(215)
- 11) 《かりる》(216)
- 12) 《なす》(217)
- 13) 《うっちゃる》(218)
- 14) 《からかみ》(222)
- 15) 《ぶつつわる》(223)
- 16) 《ばんじょー》(226)
- 17) 《ねぼすけ》(227)
- 18) 《ひゃっこい》(234)
- 19) 《くげんだ》(239)
- 20) 《けぶ》(241)
- 21) 《くさぼっこ》(247)
- 22) 《におい》(250)
- 23) 《ぼさ》(251)
- 24) 《どい》(253)
- 25) 《ちょーま》(255)
- 26) 《ありんば》(257)
- 27) 《へび》(258)
- 28) 《こーろげ》(259)
- 29) 《すりこぎ》(262)
- 30) 《やった》(266)
- 31) 《いるか》(270)
- 32) 《いた》(272)
- 33) 《(はい)》(273)
- 34) 《はんけち》(276)
- 35) 《いんき》(277)

I.2 改まった表現と日常の話しことば、との違いだから、前項I.1に準ずる(《A→B》で、Aは第一回、Bは第二回。以下同)——

- 36) 《あまい→あめー》(263)
- 37) 《しょっぱい→しょっぺー》(264)
- 38) 《こない→こねー》(271)

I.3 標準語形を除けば、前項I.1に準ずる——

- 39) 《あにき・せな→せな》(205)
- 40) 《もったいない・あったらもんだ→あったらもんだ》(219)
- 41) 《すりばち・あたりばち→あたりばち》(261)

I.4 同一語根で品詞が違う(《動詞/名詞》)だけだから、前項I.1に準ずる——

- 42) 《ちんばらたつ→ちんばらだち》(230)

I.5 ふつうの名称(単純語)に説明語を付した結果(複合語)だから、前項I.1に準ずるものとする

43)《しぐれあめ→しぐれ》(233)

I.6 母音[i]と[e]の接近した方言音を書き取った時の誤差と推測し、前項I.1に準ずるものとする

44)《あさずくり→あさずくれ》(237)

II 第一回の回答と第二回の回答が異なる語形[33項目=42.9%]

II.1 [標準語形→方言形]型 (右端のAまたはBは《A→B》で調査者として好ましいほう。以下同様) ——

- | | |
|-------------------------|---|
| 1)《いーよーだ→よかんべー》(220) | B |
| 2)《こい→こー》(224) | B |
| 3)《いこー→やべ》(225) | B |
| 4)《くいしんばー→おーまくれ》(228) | B |
| 5)《うそ→そら》(229) | B |
| 6)《こよー→こべー》(238) | B |
| 7)《のせる→けける》(240) | B |
| 8)《ゆーがた→ばんがた》(244) | B |
| 9)《とげ→ばら》(248) | B |
| 10)《やつで→てんぐっぱ》(254) | B |
| 11)《とんぼ→とんぶ》(256) | B |
| 12)《とーもろこし→とんもろこし》(260) | B |
| 13)《たくさん→おんめろ》(265) | B |
| 14)《おーげさだ→きょーこつ》(268) | B |

II.2 [方言形→方言形]型 (《A→B》で調査者として好ましいほう。A/Bは同位)

- | | |
|-------------------------------|-----|
| 15)《まみげ→まみえ》(202) | A/B |
| 16)《どらご→どらっこ》(207) | A/B |
| 17)《にばんざ・にどめ→にばんざ》(209) | A |
| 18)《ちすじ・まけ・つる→まけ》(210) | A* |
| 19)《ぬくて→ぬくい》(232) | A/B |
| 20)《しもばしら・たっぺ→たっぺ・しもだっぺ》(235) | B* |
| 21)《せんろっぽ→あめんばー》(236) | A/B |
| 22)《きっの→きんの》(245) | A/B |
| 23)《しあさって→やなあさって》(246) | A/B |

24)《おっきー→でっかい》(267) A/B

25)《ちっちゃっこい→ちっくい》(269) A/B

{注意} A*またはB*は、II.2のケースはAもBもどちらも好ましいが、A*またはB*のほうで、方言形が多いという理由で、より好ましいことを示す。

II.3 [方言形→標準語形]型 ——

26)《ひかりもの→いなびかり》(243) A

27)《ばら・とげ→とげ》(249) A

28)《じゃんぱー→うわっぱり・じゃんぱー》(275) A

II.4 [標準語形→標準語形]型その他(右端の横棒—は評価保留の意味) ——

29)《いってくれ→いえよー》(231) —

30)《みるのか→みろよー》(221) —

31)《かみなり→ゆうしぐれ》(242) [標準語形→求める語ではない] —

32)《しっけばしょ→(無回答)》(252) [実質上共にNR(無回答)] —

33)《(弟)→(父)》(274) [解釈の質問] —

以上の基準で、調査者A・Bの評価は如何に?

上記「II 第一回の回答と第二回の回答が異なる語形[33項目=42.9%]」において方言形を引き出すという点での優劣は、下記のように、調査者Bが優れていた、という結果になります。

①調査者Aが優れていた例: 5件

②調査者Bが優れていた例: 15件

③調査者A・B同位の例: 8件

④評価保留の例: 5件

引用文献

飯豊毅一(1998)『日本方言研究の課題』、国書刊行会。

佐藤亮一・白沢宏枝(1983)「同一話者の10年後の再調査」『日本方言研究会・第36回・研究発表会発表原稿集』、pp.42-53。

国立国語研究所(1985)『方言の諸相/《日本言語地図》検証調査報告』(=国立国語研究所報告84)。

徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』、ひつじ書房。